SUMMER/2022
VOL.94
発行／(公財)東京都人権啓発センター

誰もが幸せを実感できる社会へ

TOKYO人権

お知らせ

東京都人権プラザは、東京都が設置した人権啓発のための拠点施設で、公益財団法人東京都人権啓発センターが指定管理者として運営・管理を行っています。
また、アウトリーチ活動として、人権プラザ以外の場所でもさまざまな活動も展開しています。ぜひご利用ください。

※新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から臨時休館や入館制限をする場合があります。開館状況は事前にホームページでご確認ください。

出張展示は休館中でも継続しています。

出張展示

人権プラザで実施した企画展の展示物などを東京都内の学校・図書館・官公庁などの施設に貸し出します。詳しくはお問い合わせください。

人権学習会

人権プラザでは、学校や教職員、企業などの団体見学を受け入れています。専門員による展示の解説や体験学習、研修などのプログラムを用意しています。

/ 公財・東京都人権啓発センター

（公財）東京都人権啓発センター公式チャンネルでアーカイブ動画をご覧いただけます

動画はこちらから

東京都が掲げる17の人権課題

●女性 ●子供 ●高齢者 ●障害者 ●同和問題（部落差別）●アイヌの人々 ●外国人 ●HIV感染者・ハンセン病患者・新型コロナウイルス感染症等 ●犯罪被害者やその家族 ●インターネットによる人権侵害 ●北朝鮮による拉致問題 ●災害に伴う人権問題 ●ハラスメント ●性自認 ●性的指向 ●路上生活者 ●様々な人権課題 （順不同）

公益財団法人
東京都人権啓発センター
TOKYO METROPOLITAN HUMAN RIGHTS PROMOTION CENTER

〒105-0014 東京都港区芝2-5-6
芝256スクエアビル2階
TEL 03-6722-0082（総務課）
FAX 03-6722-0084
https://www.tokyo-jinken.or.jp/

東京都 人権プラザ
TOKYO METROPOLITAN HUMAN RIGHTS PLAZA

（公財）東京都人権啓発センターは東京都人権プラザの指定管理者です。

誰もが幸せを実感できる社会へ

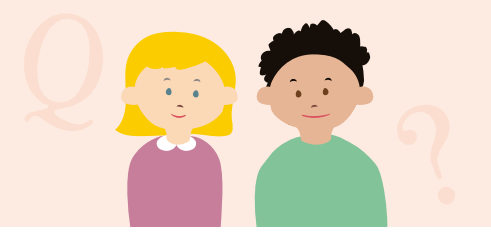
TOKYO人権

SUMMER/2022
VOL.94

目次　CONTENTS

3 INTERVIEW
在日コリアンであることを隠してきた私が小説を書く理由
作家 深沢 潮（ふかざわ うしお） さん

7 子ども相談室　子ども向け
こんなとき、どうするの？
【テーマ】無自覚な差別（外国ルーツ 補足編）



8 **外見からはわからない障害を知ろう**　新企画！　子ども向け
知っていますか？「ヘルプマーク」

人権 世界へのトビラ

9 特集
「水平社100年企画」これからの同和問題とは

10 JINKEN note
おすすめ書籍　同和問題を知る本

毎週土曜日放送中！

（公財）東京都人権啓発センターでは、人権問題をテーマに、リスナーに分かりやすく身近な話題を取り上げる人権啓発ラジオ番組を提供しています。

人権 TODAY

最近の放送テーマ 3年ぶりにリアル開催された「東京レインボープライド2022」／保護犬・猫が一緒に暮らす障害者のグループホーム

番　組　名｜人権TODAY「蓮見孝之まとめて！土曜日」内のコーナー
放　送　局｜TBSラジオ　AM954kHz／FM90.5MHz
放送日時｜毎週土曜日　朝8時20分頃から5分間
キャスター｜蓮見孝之さん、北村まあささん

Interview

在日コリアンであることを隠してきた私が小説を書く理由

作家 深沢（ふかざわ） 潮（うしお）さん

出自を明かすことが辛かった そのことが小説を書くきっかけに

小説家としてのデビュー作になった『金江（かなえ）のおばさん』を書くことになったのには、不思議な経緯があります。まずはそのことからお話しします。

離婚したばかりの頃、強い喪失感を克服するために、同じように何かで喪失感を抱え苦しんでいる人たちが集まる自助グループに参加しました。結婚から離婚にいたる経緯は、在日コリアンという自分の出自と密接に関わっていましたが、私は自身のことについて、そこで語ることができませんでした。

当時の私には、自身の出自を皆の前で開示することが、どうしてもできなかったのです。それまでの人生でもずっと隠して生きてきました。それが常に心につきまとい人生を左右しており、その頃はまだ正面から向き合うことが辛かったのです。

そんな折、グループをサポートしている方から「どうしても話せないのなら、自分の気持ちをフィクションでもいいから書いてみてはどうですか」と助言をもらい書き始めました。そして、設定を少し変え、ストーリー仕立てで書いたものを、グループのメンバーに聞いてもらったら「面白い。来週も聞きたい」と喜んでもらえたのです。

それをきっかけに、個人のブログに虚

本名を名乗れなかったことで、傷つけられた尊厳。

ふかざわ・うしお

東京都生まれ。両親は在日韓国人で父親は在日1世、母は在日2世、自身は1994年の在日コリアンとの結婚（のち離婚）・妊娠を機に日本国籍を取得。1989年上智大学文学部卒業後、外資系金融会社勤務や日本語講師などを経験。2012年『金江のおばさん』で第11回「女による女のためのR-18文学賞」大賞受賞。『ひとかどの父へ』『緑と赤』『海を抱いて月に眠る』など在日コリアンをテーマにした多彩な作品を次々に発表。最新作は『翡翠色の海へうたう』。

『海を抱いて月に眠る』
（文藝春秋）

実を織り交ぜた小説を書き始めました。そこでも反響が得られたことに刺激されて、ますますのめり込み、小説教室に通うようになりました。『金江のおばさん』は、その頃に書いたものですが、原型は、自助グループで自分の体験を語る代わりに書いたストーリーが基になっています。

本名で生きるには世間が厳しすぎた

私は幼児期から本名を隠して通称名（日本名）で生きてきました。これは両親の意向で、背景には二つの事情がありました。

一つ目は私の姉が、重い心臓の病を抱えていたことです。姉は早くに亡くなってしまったのですが、幼少期から入院や手術を繰り返し、小学校への入学を1年延期したほど病弱でした。そのため学校でも勉強や運動についていくことが難しく、そのことでいじめられる懸念がありました。そこに「在日コリアン」であることが加わったら、ますますいじめられかねないと両親は考えたのです。母が小中学校時代に随分と酷いいじめにあってきたことから、堂々と生きるには周囲からの扱いが厳しすぎると判断したのです。

二つ目は父親の事情です。父は子どもが生まれる頃まで政治運動に関わり、当時の軍事政権下の韓国で、政府に敵対する立場にありました。しかしそれが原因で親族が不利益を被ることもあり、子どもの将来に影響が出ることを恐れた父は、政治運動から離れ、日本で実業に専念する人生を選んだのです。

父は政治運動と決別したことで、一緒に運動をしていた仲間に負い目のようなものを感じていたようでした。それで、在日のコミュニティーからあえて離れて生きることを選んだ面もあったと思います。

ただ、この父親の過去については、大人になって小説を書くようになるまで、ほとんど知りませんでした。私の作品の『ひとかどの父へ』と『海を抱いて月に眠る』は、どちらも大人になった娘が、これまで知らなかった父親の人生を通じて家族の歴史を振り返る筋書になっていますが、これは私自身の体験に基づいています。

親を恨んでいた子ども時代

そうやって出自を隠していても、在日コリアンであることが分かりいじめられたことはありました。私が子どもの頃は

今以上に在日コリアンへの差別や偏見が強く、韓国籍では住居が借りられないことなども珍しくありませんでした。

普段は出自を隠していても、家の中では韓国の文化を継承し、韓国式のしきたりも大事にしていました。子どもの頃、家の近所の写真館で撮影してもらったチマチョゴリ姿の私の写真が、商店街の目立つところに飾られて、周囲の人々に出自を知られてしまったことがあります。中学生のときには、本名が同じ世代の日本人の名前としては珍しく、韓国名を感じさせることから気づかれて、噂になったこともあります。学生時代には、そのせいで友達から仲間外れにされ、大変傷つきました。

当時の日記を読み返してみると、世間や差別する人が悪いとは思っておらず、両親を責め、韓国籍である自分がいけないのだと自分を責めています。出自を隠していることによって、尊厳を感じられず、さらに差別を受けることで、自己肯定感が著しく低かったのでしょう。

出自を隠さず堂々と本名で生きるということ

友達でも恋愛相手でも、長い付き合いになり親しくなると、本当の自分を知ってもらおうと在日コリアンであることを伝えようとしました。しかしそこでもやはり拒絶されることがあり、その都度ひどく傷つきました。

それでも好きな人にプロポーズされれば、自分の出自を伝えないわけにはいきません。そのために関係が破綻したことも一度ではありません。「同じ墓には入れない」と言われたこともあります。このような挫折体験が続き、同じ環境の人と結婚するしかないと考え、お見合いを経て結婚しました。

結婚相手は、韓国籍であることを隠さず本名を名乗って暮らしている人でした。私もいざ本名で暮らし、友人にも韓国人であることを打ち明けてみると、気持ちがとても楽になりました。離れていった人もいるけれど、すんなり受け入れ、態度が変わらなかった人もいます。差別する人は向こうから寄ってこなくなるので、むしろ差別されることは少なくなりました。「これまで努力して隠してきたことは、一体何だったのだろう」と、自分で自分を追い込んでいた側面もあったと感じました。

「在日」という言葉すら知らない人でも読める作品を

小説を書くにあたって、差別や貧困のような重いテーマを扱う場合でも、読む人に覚悟を求めるような物語にすることは避けています。むしろ「ザイニチって何？」という認識の人でも、物語の世界にすんなり入っていけるよう意識して書いています。

日本は同質社会なので、自分と同じものへの共感性はとても高い半面、自分と違うものに感情移入することはなかなか難しいように見受けられます。だから小説の中では、たとえ在日コリアン設定の登場人物でも、読者に「自分と同じだ」と思わせる状況設定や描写を心がけています。

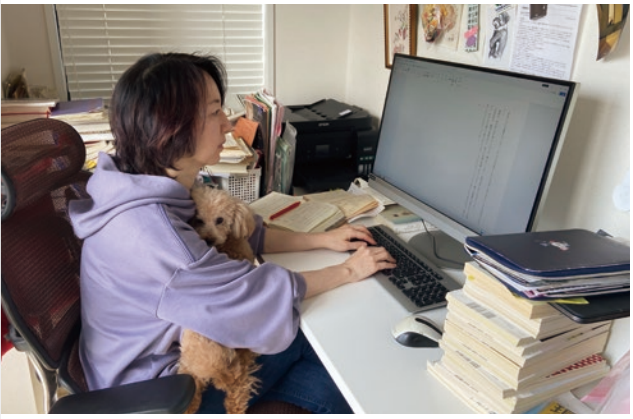
私の小説は、戦争文学のような社会的な問題を取り上げるジャンルのものではありません。例えば日常の中で、親しくしている友人が在日コリアンだったことに気づいたときに「あ、そうだったのね」と自然に受け止めてもらえるような社会が理想だと考えています。読者と同じような境遇にいて、同じようなことを考えたり感じたりしている登場人物を描くことで、読む人にもっと身近に感じてほしいのです。

在日をテーマにした物語が多いからといって、そのことに政治的な意図はありません。日常生活の中で悩んでいる女性の話や、家族の葛藤の物語の舞台として、私に縁の深い在日の問題を扱っているだけです。小説の真のテーマは人が感じる悩みや葛藤の側にあります。

マイノリティーが弱者だと決めつけないでほしい

東京の大久保にある「コリアンタウン」周辺でのヘイトスピーチは、それが最も顕著だった２０１３年に実際に現地で体験しました。『緑と赤』という作品の中でそのときの体験を基にした描写をしていますが、決して社会問題として告発したかったのではありません。実際にその現場に居合わせた者として、これは描写しておきたいと感じたからです。

ヘイトスピーチのデモ隊が通り過ぎていき、その場にいた若い女性たちの様子がガラリと変わり、まるで死んだような表情になっていくその情景や、当事者の若い男性の投げやりな態度が忘れられなかったのです。あまりにも衝撃を受けたり、尊厳が踏みにじられたり、好きなものを全力で否定されたりしたときに、人はどうなってしまうのかを物語として描きたかったのです。



執筆中の様子（自宅にて）

異なる人たちを
特別視せず、
ただ同じ世界に
存在することを認めてほしい。

深沢 潮 著『ハンサラン　愛する人びと』(新潮社)

在日コリアンへの差別に対して、積極的に対抗したり助けようとしたりしている日本人の方々もいます。ただ、そうした人の一部には、「弱者」である在日コリアンを「強者」である自分たちが、一方的に守ったり助けたりする立場としてふるまう人もいます。

日韓問題に限らず、何らかのボランティア活動をしている人の中には、眼差しが上からの視線になっている人も見受けられます。そのことに、支援されている側の人たちが傷つくこともあるのです。それでも、もちろん助けたりサポートしたりすることは、何もしないよりもずっと素晴らしいことです。

お伝えしたいのは、マイノリティーであることは、必ずしも弱者を意味しないということです。「恵まれない境遇の中で、頑張って生きている可哀想な人」としてひと括りにしないでほしいのです。そうではなく、人としての多様なあり方の一つでしかなく、それを「守られるべき弱者」として扱うことには違和感を持つのです。

自分たちと異なる属性の人たちを特別視せず、ただ存在を認めてほしい

日本の社会に在日コリアンへの差別がなくなればそれに越したことはありませんが、だからと言って、お互いが仲良くなったり、無理に好きになったりする必要は全くないと思います。

例えば隣の家が自分の家と違う習慣や思想信条を持っていたとしても、よほどのことがないかぎり、隣人として上手くやっていくでしょう。それと同じように、文化や出自のような属性が自分とは異なる人々が、身近に存在することが当たり前のことだと認められるようになってほしいのです。

これまで述べてきたように、私は在日コリアンの問題を声高に訴えようとして小説を書いているつもりはありません。それでも、そのような問題があることを知らない人たちに、私の小説を読んでもらうことで知ってもらい、心のどこかに留めておいてもらえれば嬉しいです。そして実際にそういう人が身近にいたことが分かったときには、「あ、そうだったのね」と自然に受け入れられるきっかけになってくれればよいと願っています。

インタビュー 林 勝一（東京都人権啓発センター専門員）／編集 杉浦 由佳／撮影（表紙・2～6ページ）百代

深沢さんのおすすめ書籍

キム・ジヘ 著
『差別はたいてい悪意のない人がする
見えない排除に気づくための10章』
（大月書店）

子ども相談室

こんなとき、どうするの？

・・・補足編・・・

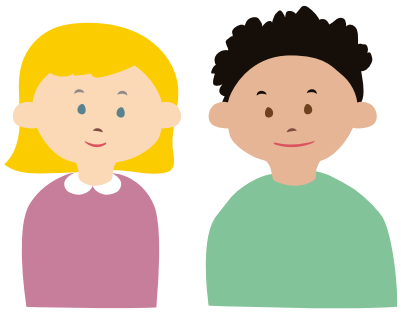
【テーマ】無自覚な差別

前号（93号）に掲載した内容について読者からご意見をいただきました。外国にルーツを持つ相談者が、友だちから目や髪の色をからかわれるという悩みに対して、「お互いに心を開いて相手をよく知ることが大事」と回答した内容について、「なぜ、いじめられた側が歩み寄らなければいけないのですか」とのご意見でした。ご指摘のとおり、まずはいじめられた側の立場に配慮することが重要でした。こうしたからかいが典型的な差別であることを、もう一度考え直してみることにしました。

あなたは外国にルーツのある人に「日本語上手だね」と言ったことはありませんか。

こういった言葉は、「日本語を話す人はこういう人だ」という思い込みによって出てくるのかもしれません。もしあなたが、街でジロジロ見られ、初対面の人から「日本語上手だね」と言われたらどんな気持ちでしょう。たとえ言った側に悪気がなくても、思い込みや何気ない言葉が相手を傷つけ、誰かの生きづらさにつながってしまっているかもしれません。たくさんの人と生きていく中で、互いに違いがあるのは当然のことなのです。もし、誰かに傷つけられたら、まずは自分の心を守ることが大切です。以下のような方法で、あなた自身を守ることができます。

執筆　編集部（東京都人権啓発センター）



自分の心を守る方法
～「ひとりじゃない」と思えるはず！

HAFU TALK／ハーフトーク

当事者のコミュニティとつながる…例えば、こんな仲間づくりサイトがあります！

WEB サイト
https://www.hafutalk.com/

経験者の体験談を読む
…例えば、こんな本があります！

『「ハーフ」ってなんだろう？
あなたと考えたいイメージと現実』
（下地ローレンス吉孝 著／平凡社）

外見からはわからない障害を知ろう

新企画

このコーナーでは、外見からは気づきにくい障害について解説します。

障害があると聞いて、どんなことを想像しますか？
外見からは気づきにくい障害がたくさんあります。

知っていますか？ ヘルプマーク

ヘルプマークは、外見からはわからなくても援助が必要な人が身につけるマークです。義足や人工関節を使用している人、心臓など体の内部に障害のある人や難病の人、または妊娠初期の人などが活用しています。東京都福祉保健局が最初に作り、今では全国で使われています。

つかっている人の声※

伝えにくい不自由さを抱える人に寄り添ってくれて、心も救われる。

体調不良のとき座席をゆずってもらえてありがたい。

※東京都福祉保健局『平成30年3月発行 ヘルプマーク・ヘルプカード エピソード集』を参考に作成

このコーナーでは、主に中高生向けに世界の人権問題の解決に取り組む団体を紹介します

人権世界へのトビラ（全8回）Vol.4

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

すべての子どもの権利が実現される世界をめざして「公益財団法人 日本ユニセフ協会」

ユニセフは世界中の子どもたちの命と健康を守るために活動する国連機関です。世界のどこに生まれても、持って生まれた可能性を十分に伸ばして成長できるように… ユニセフは「子ども最優先」を掲げて、支援活動を続けています。日本ユニセフ協会は、現在先進国を中心に33の国と地域に設置されているユニセフ協会（国内委員会）の一つです。各国内委員会は、ユニセフ本部との協力協定に基づき、募金活動、広報活動、アドボカシー活動（政策提言）に取り組んでいます。

（出典：（公財）日本ユニセフ協会ホームページ　https://www.unicef.or.jp/about_unicef/）

注目の一枚

祖母と一緒に15キロの道のりを歩いてウクライナ南部のオデッサからポーランド国境のメディカにたどり着いた子ども（2022年3月5日撮影）

東部ヨーロッパに位置するウクライナでは、2022年2月から続く緊張状態、および8年にも及ぶ東部の紛争によって、750万人の子どもたちの命と生活が差し迫った脅威にさらされています。危機の中でも、ユニセフはウクライナ国内に留まり、子どもたちと家族のための支援活動を継続するとともに、周辺国に避難しているウクライナ難民支援も強化しています。ユニセフは、ウクライナの子どもたちが命を守られ、学ぶ権利や遊ぶ権利が奪われないよう、そして尊厳のある生活が過ごせるよう、また、新型コロナウイルス禍でも必要な支援を継続して享受できるよう、活動を展開しています。

（出典（文、写真）：（公財）日本ユニセフ協会ホームページ https://www.unicef.or.jp/kinkyu/ukraine/）

お知らせ

日本ユニセフ協会 子どもと先生の広場 YouTubeチャンネル

世界の子どもたちやユニセフの活動などについて、学校向けにコンテンツを発信しているウェブサイト「子どもと先生の広場」のYouTubeチャンネル。先生方の授業に、そして児童・生徒の調べ学習にお役立てください！

特集「水平社100年企画」

これからの同和問題とは

同和問題（部落差別）の解消を目指して被差別部落の人たちが集い、全国水平社を創設してから2022年3月3日で100年を迎えました。「人の世に熱あれ、人間に光あれ」と掲げた水平社宣言は、差別や偏見に苦しむ人たちを励まし、その理念は、日本の人権運動をけん引してきたとも言われています。

戦後、基本的人権を保障する日本国憲法の下で、同和問題については、当事者団体による運動や国をはじめとする行政の施策を通して、改善も見られました。一方、今日の人権状況が十分かと言えば、そうとも言えません。水平社創設100年を機に、同和問題に詳しい研究者とジャーナリストのお話から、これからの未来をどう見つめていけるか考えてみたいと思います。

●寄稿●

「身近でない人」がそばにいる多様性

1922年の全国水平社の設立からさかのぼること約半世紀。1871年に明治政府は、エタ・非人などの賤民制（せんみんせい）※1を廃止した。にもかかわらず、旧賤民に対する差別はなくならなかった。水平社の創立大会に参加したある人物は、当時の心境を次のように語っている。

「そのときの気持ちはうれしいというか恐ろしいというか、何ともいえない気持ちでした。我々はそれまで部落のことを隠そう隠そうとしていたのに、自分の方から看板かかげて、大会を開くというわけでしょう。何でそんなことをするのかという思いと、何とかせにゃならんという期待が入り交ざった、何ともいえない気持ちでした。会場に行っても、入ろうかこのまま帰ろうか、だいぶ逡巡（しゅんじゅん）しました」（『証言・全国水平社』福田雅子、日本放送出版協会、1985年）

被差別部落※2で生まれ育った私は、この複雑な心境がよくわかる。負の歴史の副産物である被差別部落（民）は、本来はあってはならない存在だ。なくなったはずの賤民が、差別を媒介として残ってしまったのだから。

水平社創立大会の当日に配布された「宣言」には「吾々がエタである事を誇り得る時が来たのだ」と記されている。私たちは旧賤民＝部落民ではないと否定したのではなく、肯定した。部落解放運動は当初から、なくなったはずの存在を認めることから始まった。

部落は差別があるから存在するのだが、反差別運動もそれを残してきた。差別反対を訴えるためには、自分のルーツを認めざるを得なかった。私の祖父ふたりは、水平社が設立された翌年に、差別発言に抗議したため弾圧を受け、有罪判決を受けた。

それから半世紀―。

「君たちも差別を受けるかもしれない。差別に負けないよう地域の歴史を学ぼう」

地域住民や教師にそう言われて、私は育った。自分のルーツを頭の片隅に置きながら、大人になった。どんな立場の人であっても、自らのルーツを受け止めることは大事である。それを踏まえて自分がどう生きるか、生きたいかを考えることは重要ではないか―。私はそう考えるようになった。その意味で、水平社創立や祖父たちの闘いには意味があった。

これまで見てきたように、部落民とそうでない者を分ける重要な要素のひとつは、ルーツである。「あなたたちと何が違うのか」と部落民は「同一性」を訴えてきたが、私は部落問題を「違い」「多様性」として語るべきだと考えている。というのも、たとえば私は、よくも悪くも、部落にルーツを持つ者として物事を考えている。この私もまた、歴史の副産物なのである。問題は、ルーツに優劣を持ち込むことであろう。

「私の身近に部落民はいない」「部落差別なんて聞いたことがない」。部落問題の話になると、そう言いつのる人がいる。自分に「身近でない問題」は、いくらでもある。地域、世代、可視・不可視、教育、無関心などの要因によって、各問題との距離は異なる。

だが、身近でないと突き放した瞬間に、多様な人びとによって成り立つ社会が、自分から遠ざかってしまう。たとえば日本国籍を持つ私が、外国人問題、あるいは海の向こうの戦争は、身近ではないと考えることはいいことなのだろうか？

日本で東京ほど多種多様な人間が住む都市はない。わたくしごとを言えば、身内を含めて、被差別部落にルーツを持つ人を何人も知っている。身近に「身近でない人」がいることを頭の片隅におく。それが多様な社会を認め、その一員である自分が生きやすくなる第一歩だと私は考えている。

角岡伸彦（かどおか・のぶひこ）フリーライター。1963年、兵庫県生まれ。関西学院大学を卒業後、神戸新聞記者を経てフリー。著書に『被差別部落の青春』『ふしぎな部落問題』『はじめての部落問題』など。

●取材●

意識変える「想像の冒険」を

東京の同和問題の現状は、都市化の進行などにより「明確な把握が極めて困難」と言われています。実態が見えづらい同和問題をあらためて知ることの意味を、社会学者で同和問題を専門に研究されてきた野口道彦さんに伺いました。

水平社100年と現在

水平社の創立は、差別を受けてきた人たちが自分たちの手で差別をなくす運動として立ち上げたという点で、当時の社

※1 法的身分制度によって賤民を最下層民として位置付け、社会的賤視を固定化する制度。1871年の太政官布告（解放令）により、賤民制度は法的には廃された（平凡社『百科事典マイペディア』より）。

※2 おもに近世における賤民的身分に起因して差別を受けている人々が居住する地域をさす。近代以後の政策による移転や流入等によって必ずしも近世の賤民居住地域と一致するわけでない（小学館『日本大百科全書』より）。「同和地区」とほぼ同じ意味で使われている。

人権に関するコラムや体験、
おすすめの映画や書籍など紹介するコーナー

JINKEN note

おすすめ書籍：同和問題を知る本

同和問題を「もっと知りたい」に応える書籍の紹介

同和問題（部落差別）をテーマにした書籍は、専門書が多く出版されていますが入門書は多くありません。手軽にアクセスできるインターネット上の情報の中には、偏見を助長する内容の動画や電子書籍などが多く存在します。プライバシー侵害につながる恐れがある情報や差別を助長する内容からは距離を置き、「見ない、伝えない」という態度が大切です。行政が発信する情報以外に、同和問題に関心を持った人が、分かりやすい言葉で書かれた体験談などに触れる機会が乏しいことが課題となっています。「もっと知りたい」と思ったときに学べる情報源として、定評のあるものを紹介します。

当事者を知る

『部落問題と向きあう若者たち』
内田 龍史 著
（関西大学社会学部教授）
2014 年／解放出版社

部落問題と向きあっている若者たちが、どのように部落問題と出合い、どのような経験をし、今どのようなことを考えているのか。部落の若者たちのインタビュー集。

より深く学ぶ

『ふしぎな部落問題』
角岡 伸彦 著
（フリーライター）
2016 年／ちくま新書

インターネット上で部落に関する情報が拡散されていること、部落解放運動の変化などについて解説。同和問題の未来の方向性を模索する内容。

会状況の中では大いに評価すべきだと思います。水平社創立をきっかけに、これまでの100年でさまざまな運動や取り組みが起こりました。

今では、同和問題を具体的に身近に感じたことがないという人が多く、東京では、[※3]「同和地区は少なく、同和地区出身者も多くはない」と思われています。しかし、明治以来、全国各地の同和地区から東京に移り住んできた人は多く、その人たちの多くは同和地区出身ではない人と結婚しています。子どもにも語り継がない人がほとんどなため、「私は関係ない」と思っていても、実際には2分の1、4分の1、16分の1など同和地区にルーツを持つ人も多いのではないでしょうか。

差別を生み出す態度とは

では、なぜ語り継がれないのでしょうか。同和地区出身であることをネガティブに捉える意識が今でも存在するからです。こういった意識がなくなれば、同和地区にルーツを持つことを語ったとしても、何の問題もないはずです。

各地の市民意識調査では、同和地区出身者との結婚を避けるという回答が、2割から3割ほどは見られます。同和問題に対する予断と偏見が理由でしょう。他人からどのように見られるかを気にして、同和地区出身者と思われるような「印」を遠ざけています。これが差別を存続させているのです。結婚に限らず、同和地区と思われるところに住みたくないという人や、部落産業として発展してきた職業を避ける人もいます。「自分には関係のない話として遠ざけておこう」としているのです。

批判的な見方で差別の根を断つ

同和問題では、根拠のない噂話（うわさ）がまことしやかに伝えられていくということが起こっています。例えば、周囲の誰かから「あそこには近づかない方がいい」といった噂話を聞いたとき、疑問を抱かずそのまま受け入れてしまうことはよくあることです。そんな話を聞いたときは、一歩立ち止まって「それは本当かどうか」と考え直すことが必要でしょう。他のマイノリティ問題でも、噂話から差別が生まれることがあります。噂話を受け入れて、それを他の人に伝えていくと、知らず知らずのうちに差別に加担してしまいます。

思い込みを捨て想像の冒険を

「同和地区出身」と名乗っている人は非常に少なく、身近な問題として実感しにくいところがあります。出会ったことがないから、「特別な人なのではないか」と勝手に想像してしまうのかもしれません。「私は、同和地区出身ではない」という思い込みを捨て、「ひょっとすると私も同和地区にルーツがあるかも」と想像してみる冒険をやりませんか。そうすれば、同和問題（部落差別）の理不尽さが分かってきます。自分も含めて色々な背景を持つ人がいるのだと意識し続けていれば、見方は自ずと変わってくるはずです。

インタビュー・執筆　吉田 加奈子（東京都人権啓発センター専門員）

野口 道彦 のぐち・みちひこ
大阪市立大学人権問題研究センター名誉教授（社会学）、一般社団法人和歌山人権研究所理事長。1945年生まれ。著書に『部落問題論への招待』『部落問題のパラダイム転換』など。

※3 東京都総務局人権部『人権に関する都民の意識調査 報告書』によると、同和問題を知ったきっかけを問う設問に対し「同和問題を知らない」の回答の割合が20.4％という結果が出ている。
https://www.soumu.metro.tokyo.lg.jp/10jinken/base/upload/pdf/ishiki.pdf

EVENT 人権啓発行事のご案内とお知らせ

6月は「就職差別解消促進月間」です。

東京都では、6月を「就職差別解消促進月間」とし、東京労働局およびハローワーク等と連携して様々な啓発活動を行っています。

※月間行事の詳細については、東京都のホームページ等でご確認ください。

人権啓発映画会

様々な人権課題

映画を通して、公正採用と人権についてあらためて考える機会としたいと思います。

映画会

日　　時	2022年6月28日（火）13:15～16:45
上映作品	「なぜ公正採用選考は基本なのか」「イーちゃんの白い杖」
定　　員	150名（無料。事前申し込み制・先着順）
会　　場	台東区生涯学習センター 2階ミレニアムホール（台東区西浅草3-25-16）
問い合わせ	（公財）東京都人権啓発センター TEL 03-6722-0085

※新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、オンラインのみの開催とする場合があります。
情報保障・託児保育あり（詳しくはお問い合わせください）。

東京都人権プラザ企画展　人権カルチャーステーション

様々な人権課題

アート、アニメ、映画、音楽、ゲーム、ドラマ、マンガなど身近なコンテンツを人権の視点から紹介します。各ジャンルの専門家の解説を通して、各作品を今までと異なる視点で鑑賞・体験する機会を提供します。

展示

会　　期	2022年5月13日（金）～2022年7月29日（金）
開室時間	9:30～17:30 日曜休館（祝日は開館）
内　　容	作品と解説パネル展示等
会　　場	東京都人権プラザ 1階 企画展示室

第2回人権問題都民講座（全6回予定）「『風の谷のナウシカ』を読む」

様々な人権課題

環境問題に直面した人間同士の対立などを描いている『風の谷のナウシカ』を題材に解説。異なる社会や文化圏で生きる人間同士の共生に必要なものを考えます。※情報保障、その他配慮が必要な方はお問い合わせください。9月以降は障害などをテーマとして取り上げる予定です。

講座

日　　時	2022年7月16日（土） 14:00～16:00
講　　師	稲葉 振一郎（明治学院大学社会学部教授）
申込締切	2022年7月11日（月）
参加方法	会場とオンライン同時実施予定
定　　員	会場40名、オンライン（Zoom）100名

第1回子供人権教室（全2回予定）「世界の森の人権問題－ボルネオナッツバターを使ったハンドクリームを作ってオランウータンが住む森を守ろう！」

様々な人権課題

インドネシアとの中継やハンドクリーム作りを通じて、パーム油の生産に潜む人権問題について学びます。※12月ごろ、障害がテーマの参加型ワークショップを開催する予定です。

教室

日　　時	2022年8月20日（土） 14:00～16:00
申込締切	2022年7月29日（金）
参加方法	オンライン（抽選で30組）
対　　象	都内在住・在学の小学3年～中学生

新型コロナウイルス感染症に係る人権問題に関する専門電話相談

新型コロナウイルス感染症等

新型コロナウイルス感染症に係る人権問題について、「電話」で相談をお受けし、相談内容に応じて助言を行うほか、必要な場合は別途適切な調整を行い、相談者の抱える問題の解消をサポートします。

相談

日　　時	平日9:30～17:30（土日祝・年末年始を除く）
電話番号	**03-6722-0118**

東京都人権プラザ（指定管理者：（公財）東京都人権啓発センター）　港区芝2-5-6　芝256スクエアビル　TEL 03-6722-0123

※新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から臨時休館および会期変更等の可能性があります。最新情報は東京都人権プラザホームページにてご確認のうえ、ご来場ください。

（公財）東京都人権啓発センター賛助会員募集のご案内

皆様とパートナーシップを築き、人権意識の高揚、人権問題の解決に向けて、ともに手を携えてまいりたいとの趣旨から「賛助会員制度」を設けております。趣旨にご賛同いただき、是非ご加入下さい。

個人賛助会員　一口　**2,000**円

団体賛助会員　一口　**30,000**円

問い合わせ　TEL **03-6722-0082**
（（公財）東京都人権啓発センター　総務課まで）

団体会員の皆様

（公財）東京都農林水産振興財団
（公財）東京都中小企業振興公社
（株）首都圏環境美化センター
（一財）東京都人材支援事業団
（株）ミライト・テクノロジーズ
東京都中小企業団体中央会
東京都下水道サービス（株）
（公財）東京都歴史文化財団
（一財）東京都営交通協力会
（一社）東京都信用組合協会
（一社）医療大麻dotオルグ
東京人権啓発企業連絡会
（公財）東京都学校給食会
（一社）東京環境保全協会
東京臨海高速鉄道（株）
（株）東京エイドセンター
（公財）東京しごと財団
東京交通サービス（株）
東京都住宅供給公社
東京都職員信用組合
東京都商工会連合会
東京臨海熱供給（株）
（株）東京ビッグサイト
（公財）東京観光財団
（公財）東京税務協会
東京都公立大学法人
（一財）東京都弘済会
自治労東京都本部
（株）東京交通会館
東京食肉市場（株）
NPO 法人TEOS
東京港埠頭（株）
（株）ゆりかもめ
（順不同）

編集後記　「語り出すこと」で何かが始まる。深沢潮さんの著書『緑と赤』の主人公は、自らのルーツを親しい人に明らかにしたことで様々な反応にさらされる。悪意のない言葉でも刃物のように胸が切り刻まれる。不安に飲み込まれ塞ぎこんでいく結末の先に示されるのは、属性に縛られることなく自由に生きることの大切さである。（林）

Vol.94 2022年夏号　2022年5月31日発行（年4回発行）

マルチメディアDAISY版を作成しています。ご希望の方は（公財）東京都人権啓発センターまでお問い合わせください。「DAISY（デイジー）」とは、視覚障害などさまざまな理由で活字を読むことが困難な方のための、デジタル図書です。

この冊子は再生紙を使用しています。本誌の無断転載はお断りします。本誌を研修等でご利用の際は出典をご明記ください。

誰もが幸せを実感できる社会へ

TOKYO人権

制作　株式会社ブックマーク
発行　公益財団法人　東京都人権啓発センター
〒105-0014 港区芝2-5-6　芝256スクエアビル2階
TEL 03-6722-0085　FAX 03-6722-0084
https://www.tokyo-jinken.or.jp/